

アジア・アフリカ学術基盤形成事業 平成 22 年度 実施報告書

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	名古屋大学大学院文学研究科
(カメルーン) 拠点機関：	ヤウンデ大学 I
(マリ) 拠点機関：	バマコ大学
(セネガル) 拠点機関：	シェイク・アント・ディオップ大学
(タンザニア) 拠点機関：	ダルエスサラーム大学

2. 研究交流課題名

(和文)：伝統的生活様式の崩壊と再宗教化をめぐる現代アフリカにおける宗教動態

(交流分野：文化人類学)

(英文)：Religious Dynamics of Contemporary Africa concerning the destruction of Traditional Life Mode and New Religious Movement

(交流分野：Cultural Anthropology)

研究交流課題に係るホームページ：

<http://afroasia.lit.nagoya-u.ac.jp/~hikaku/dryland/dynamicsreligion/pg267.html>

3. 採用年度

平成 21 年度 (2 年度目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関：名古屋大学大学院文学研究科

実施組織代表者 (所属部局・職・氏名)：

名古屋大学大学院文学研究科・研究科長・羽賀祥二

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：

名古屋大学大学院文学研究科・教授・嶋田義仁

協力機関：

事務組織：研究協力部研究支援課、文系事務部経理課

相手国 (地域) 側実施組織 (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国 (地域) 名：カメルーン

拠点機関：(英文) University of Yaoundé I

(和文) ヤウンデ大学 I

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：（英文） Faculty of Arts, Letters and Human
Sciences ・Associate professor ・Saibou Nassourou

協力機関：（英文） University of Ngaoundéré
（和文） ガウンデレ大学

（英文） University of Maroua
（和文） マルア大学

（２）国（地域）名： マリ

拠点機関：（英文） University of Bamako
（和文） バマコ大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：（英文） Faculty of Languages, Arts and Human
Sciences (FLASH) ・ Professor ・ Samba Djiallo

協力機関：（英文）
（和文）

（３）国（地域）名： タンザニア

拠点機関：（英文） University of Dar es Salaam
（和文） ダルエスサラーム大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：（英文） Institute of Swahili ・ Professor ・
John G.Kiango

協力機関：（英文）
（和文）

（４）国（地域）名： セネガル

拠点機関：（英文） Cheikh Anta Diop University
（和文） シェイク・アンタ・ディオップ大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：（英文） Fundamental Institute of Black Africa
(IFAN) ・ Professor ・ Abdou Salam Fall

協力機関：（英文）
（和文）

5. 全期間を通じた研究交流目標

「伝統的生活様式の崩壊と再宗教化をめぐる現代アフリカにおける宗教動態」をテーマに、日本側拠点機関に属する研究者とアフリカ拠点機関に属する研究者とのあいだで、共同研究・研究者交流、セミナー等の学術交流をおこない、共同研究を推進する。そのために、おもに以下のことをおこなう。

1. 日本側拠点機関に属する研究者とアフリカ拠点機関との間で、研究情報を共有するインターネット・ネットワークを構築する。

2. アフリカ拠点機関に眠っている修士論文、博士論文、未刊論文などを共通して利用できるデータ・ベースを構築する。
3. 研究成果は電子ジャーナル *Religious Dynamics in Africa* と簡易印刷でも公刊する。
4. 日本人若手研究者のみならずアフリカ人若手研究者の育成を、アフリカと日本の共同指導によっておこなう。そのために、民間財団資金や国費留学生制度を利用して、日本人大学院生のアフリカの大学への留学、アフリカ人大学院生の名古屋大学への留学を推進する。
5. 研究は、3 テーマ「アフリカ・イスラームの動態」「アフリカの都市化とグローバル化の中での宗教動態」「伝統価値の崩壊と青少年・教育問題と宗教」を柱にしてすすめる。

6. 平成22年度研究交流目標

1.前年度と同様に「伝統的生活様式の崩壊と再宗教化をめぐる現代アフリカにおける宗教動態」という共同研究を、次の3点において、すすめる。

- ① この数十年のアフリカの著しい変貌による伝統的生活様式・伝統的価値の崩壊にもなう精神的危機の存在。
- ② それにともなう「再宗教化」。
- ③ 経済開発一辺倒でアフリカ問題を解決することの限界。

2. また、この研究を、3 テーマ「アフリカ・イスラームの動態」「アフリカの都市化とグローバル化の中での宗教動態」「伝統価値の崩壊と青少年・教育問題と宗教」を柱にしてすすめる。

3. そのうえで、「伝統的生活様式の崩壊と再宗教化をめぐる現代アフリカにおける宗教動態」をめぐる国際共同研究推進を、本年は、アフリカの大学中心にすすめることに重点をおく。また本年度の国際共同研究には、日本アフリカとも若手大学院生の交流を含める。

4. 本年は昨年の研究交流の成果、および、本年の新たな成果を、研究報告 *Religious Dynamics in Africa* として公刊する。その際、以下のメンバーを編集員として、国際的な編集・査読体制による研究成果の公表をめざす。そのなかで、日本とアフリカの若手研究者の育成をはかる。

- ・バマコ大学 Naffet Keita 准教授、Samba Djallo 教授・副学長
- ・ヤウンデ大学 I Saibou Nassourou 講師・カメルーン女性問題省次官
- ・マルア大学 Mahmoudou Djingui 准教授
- ・シェイク・アンタ・ディヨップ大学 IFAN の Abdou Salam Fall 教授
- ・ダルエスサラーム大学 John G.Kiango

7. 平成22年度研究交流成果

7-1 研究協力体制の構築状況

平成21年度に、「伝統様式の崩壊と再宗教化をめぐる現代アフリカの宗教動態」という本プロジェクト名で、3回の国際シンポジウム・ワークショップおこない、この課題のなか

から具体的にはいかなるテーマが取り出されるか共同研究したところ、独立 50 年を迎えるアフリカの「再生」というテーマが浮上した。

そこで、本年は、「再生としてのアフリカ独立 50 年」にテーマを絞り、3 回の国際シンポジウム・ワークショップを名古屋大学で開催した。プレミーティングとして、第 2 回国際ワークショップ「再生としてのアフリカ独立 50 年」、第 2 回セミナー：第 2 回国際シンポジウム「再生としてのアフリカ独立 50 年」（12 月 13 日 - 15 日）、そして、ポストミーティングとして、第 3 回国際シンポジウム「再生としてのアフリカ諸国独立 50 年」（3 月 3 日）もおこなった。これには、カメルーン（ガウンデレ大学 1 名）、マリ（バマコ大学 2 名）、タンザニア（ダルエスサラーム大学 1 名）が参加した。

他方、日本からは和崎春日中部大学教授がカメルーンのヤウンデ第一大学、石山俊総合地球科学研究所員がバマコ大学、高村美也子名古屋大学文学研究科博士研究員がダルエスサラーム大学、ウスマヌ・アダマ名古屋大学文学研究科博士課程後期院生がカメルーンのカウンデレ大学とマルア大学に赴き、各大学の研究者および大学院生との共同研究と研究交流をおこなった。本年はとくに、大学院生や若手研究者レベルでの交流を目指したが、その目標はおおきく達せられた。特に、若手研究者のイニシアティブでの共同研究計画がすすむ可能性がでてきた。特に、ウスマヌ・アダマは出身大学に戻り、名古屋大学での研究状態を同年輩の研究者に伝え、嶋田の指導を希望する大学院生の存在も把握してきた。

平成 21 年より、嶋田は Maroua 大学の学術委員となり、Maoroua 大学の学術雑誌の編集委員として、Maroua 大学の学術出版に貢献しているが、平成 22 年度も引き続き同じ任務に就いている。他方、ガウンデレ大学のハマドゥ・アダマ教授も共同研究とセミナー参加のために名古屋を訪れ、カメルーンの口頭史研究およびカメルーンに保存されているアラビア語、およびアラビア文字で記されたフルベ語文書の発掘と出版にむけて共同研究を推進しようという合意が成立した。

また、マリのバマコ大学との間でも、次回の国際会議はバマコ大学で開催しようという検討にはいった。

7-2 学術面の成果

最大は、「伝統的生活様式の崩壊と再宗教化をめぐる現代アフリカにおける宗教動態」という共同研究テーマの中心課題として「再生としてのアフリカ独立 50 年」というテーマが浮上し、このテーマを中心に 3 回の国際シンポジウム・ワークショップを開催できたことである。「再生」というのはセネガルが本年その独立 50 年を祝うに際して用いたスローガンであるが、その言葉には、植民地体制のなかで生まれたアフリカ 50 年の国家の歴史を根本的に再検討しようというアフリカの庶民から政治・経済エリートに至るまでの共通な思いが込められている。そしてそれを裏打ちするかのよう、アフリカ連合 (AU) が成立し、アフリカは今 2015 年には「アフリカ合衆国」建国まで目指すプログラムまで設定している。そこまでは非現実的であろうと、アフリカ研究者も考えているが、10 ケ国ほどを単位とした地域共同体の強化は急速度ですすみ（共通パスポート、共通運転免許証、共通自動車登

録、関税なしの貿易、隣国との交流を促す道路交通網の整備)、アフリカの大学の研究協力者たちは、それぞれ様々なレベルで、地域共同体 (Regional Community : 西アフリカ共同体、東アフリカ共同体、赤道アフリカ共同体、南アフリカ共同体など) 形成に必要な行政的な諸問題に取り組んでいる。

本年の共同研究では、地域共同体形成の進展具合とそこに生じている諸問題を、特に高等教育・教育の面に注目して共同研究した。そこで明らかになったのは、

①黒アフリカ諸国の政治的経済的安定化にともない、大学のマス教育化が著しくすすんだ (地理学研究室の学生だけで数百人！)。

その結果、②首都一極集中であった大学教育の地方分散化がすすんでいること (最近新設されたカメルーンのマルア大学はその例)。

それにともない、③大学のアフリカ内国際化がすすみ、大学教員は隣国の大学でも授業をおこない、他方学生も国境を自由に超えて隣国の大学で学ぶようになっていること (一大学の学生の3分の1もが外国人と言う例もある)。

こうしたアフリカの地域内国際交流の活発化は、外国籍学生と地元学生との軋轢もうみつ、ナショナル・アイデンティティを超えたあらたなアイデンティティ形成 (アフリカ・アイデンティティ) もひきおこす。しかしそれには紆余曲折があり、アイデンティティ不安には、イスラームやキリスト教の急進派や原理主義、オカルト運動などがからむ。こうしたアフリカ内グローバル化にともなう諸問題が、明らかになった。

7-3 若手研究者養成

これは3方向でおこなわれた。

第1は、上記したようなアフリカの再生運動の現実をめぐる議論によって、若手研究者の多くが、新しいアフリカの姿に目を開かれた。議論されたことは、若手研究者も多かれ少なかれ経験的に知っていることであった、そこに含まれる重大な意味を汲みとる方法を教育されるとともに、このような問題を学問的対象とすることの必要性を認識するに至ったのではないかと考えている。

第2には、この共同研究やセミナーには若手研究者・大学院生も多く参加し、研究発表も行い、具体的な研究指導を、日アの研究者は受けることができた。そのうえで、研究報告 *Religious Dynamics in Africa* 掲載の論文指導もうけている。

第3には、上記したように、本年は3名の若手研究者をアフリカの大学に派遣して、アフリカ人研究者の指導を受け、また若手研究者と交流をもつことができた。

7-4 社会貢献

具体的な社会貢献はまだない。しかし、本研究によって、まさに今の現在のアフリカの姿に目を開かれつつある本研究は、メンバーそれぞれが、その研究を通じて、現代アフリカがかかえるまったく新しい問題に取り組み、現代アフリカの将来に貢献するような研究をなしとげるはずである。

7-5 今後の課題・問題点

① アフリカ独立 50 年にともなう「アフリカ再生」と言う問題は、きわめて今日的な問題であり、そのバックボーンとなる、植民地体制下に成立したアフリカ国民国家という事実や、アフリカ連合 (AU) の形成、それにとともなう地域共同体の活性化強化と言う問題は、日本のアフリカ研究者間においてさえ十分認知されていない問題であり、日々刻々とかわるその流動的なアフリカ現代情勢を、英仏の論文やニュースを追いつつしっかり把握するというのは、日本の若手研究者にとっては、はっきりとした問題意識を植え付けられていないことには、大変困難な作業である。AU 形成をめぐる研究書出版も現在まだ少数である。こうしたアフリカ現代情勢にかかわる「啓蒙活動」が必要であり、これは本研究プロジェクトの研究成果の公表方式においても考慮しなければならない。『AU 形成』あるいは、『アフリカ合衆国』というような新書版の出版も考える必要がある。

② ただし、アフリカ人研究者たちは、こうした現代的な情勢について関心以上に、その実務に参加している場合が多い。また、大学院生レベルの若手研究者にとっても、かれらの将来を決定する問題だけに、強い関心を払わなければならない問題である。

この研究を強力に推進するためには、アフリカ人若手研究者に強いインセンティブをあたえる必要がある。これはこれまでの連携アフリカ大学研究者と共同して、推進していく必要がある。本年の研究報告においては、こうした若手研究者の研究を多く載せる予定である。

③ 「アフリカ再生」という新主題の発見に至ったことは、本プロジェクトの特筆すべき成果であるが、この主題のもとに詳細な個別研究をすすめるには大きな困難がある。この主題を AU 形成や、地域共同体の強化など、政治行政的な組織レベルで研究することは比較的簡単であるが、「アフリカ再生」が住民の日常生活レベルでどのように展開しているかを研究するためには、実に多岐にわたる主題にアプローチしなければならないからである。上記した高等教育・研究分野の問題以外にも、たとえば、女性の地位や生活戦略にどんな影響がでているのか、アフリカの地域紛争にどのような影響がでているのか、アフリカでさかんなポピュラーミュージックや絵画芸術、造形芸術、あるいは若者のファッションなどで、どのように展開されているか、イスラーム教師やキリスト教聖職者のあいだではどのように理解されているか、アフリカの定期市商人の経営戦略にどのように影響しているか（隣接する数ヶ国の定期市を巡回する商人もあらわれている！）、などの問題にもアプローチしなければならない。本年はこうした個別的テーマをいくつか発掘することに努めたが、住民の日常生活における「アフリカ再生」と言うテーマは、これから 10 年近くの間をかけて取り組んでゆく問題であるだろう。

7-6 本研究交流事業により発表された論文

平成 22 年度論文総数 31 本 (内 9 本印刷中、1 本投稿中)

うち、相手国参加研究者との共著 1 本

うち、本事業が JSPS の出資によることが明記されているもの 8 本

8. 平成22年度研究交流実績概要

8-1 共同研究

以下の4名のアフリカ研究者が来日、名古屋大学におけるセミナーをはさんで共同研究をおこなった。「再生としてのアフリカ独立50年」を共通テーマに、タンザニアを中心とする東アフリカ、マリ、カメルーンの状態を共同分析した。

- ・ ジョン・キアング：ダルエスサラーム大学教授（12月13—16日）
- ・ サンバ・ジャーロ：バマコ大学教授（12月12—28日）
- ・ ハマドゥ・アダマ：ガウンデレ大学教授（2月22—3月6日）
- ・ ナフェ・ケイタ：バマコ大学准教授（2月25日—3月7日）

また、以下4名の日本側研究者がアフリカの連携大学に派遣されて、共同研究をおこなった。

- ・ 和崎春日中部大学国際関係学部教授：カメルーンのヤウンデ大学Iにて共同研究（8月27日—9月6日）。研究テーマ：在日アフリカ人の研究。
- ・ 高村美也子名古屋大学文学研究科博士研究員：タンザニアのダルエスサラーム大学スワヒリ研究所にて共同研究（2月25—3月19日）。研究テーマ：スワヒリ文化の研究。
- ・ ウスマヌ・アダマ名古屋大学文学研究科博士課程後期大学院生：カメルーンのカウンデレ大学とマルア大学にて共同研究（3月5日—3月24日）。研究テーマ：イスラーム化の研究。
- ・ 石山俊総合地球環境学研究所研究員：マリのカムコ大学にて共同研究（3月15—3月21日）。研究テーマ：マリにおける農耕開発と砂漠化の研究。

なおコーディネーターの嶋田義仁は別途資金にて、マリ国バマコ大学（平成23年1月）、エチオピア国アジスアベバ大学（23年3月）を訪れ、各大学の研究者と共同研究をおこなった。エチオピア訪問は、「再生としてのアフリカ独立50年」を考察するうえで重要なアフリカ連合（AU）の本拠訪問の機会でもあり、広報担当者と面会、若手研究者によって内部の案内をうけるとともに、アフリカ連合の成り立ちについての情報やアフリカ連合の出版物の提供をうけた。その中で最も驚かされたのは、アフリカ連合の本拠建物は、現在、創設時の旧館とその後建設された新館があるが、その隣では20階建てにもなる高層ビルが次の本拠として建築中で、しかもそれが中国の資金援助によるということであった。若手研究者からは「日本の影は薄いね」とからかわれたが、「アフリカ合衆国」へむけての歩みが着実にすすんでいるのではないかとおもわせるアフリカ連合本拠風景であった。若手研究者（アジスアベバ大学の博士課程所属）は、本研究プロジェクトに関して強い関心を示したので、彼にはレポートを送ってくれるよう要請した。

8-2 セミナー

平成 22年7月10日（プレ・セミナー）、12月13-15日（本セミナー）、平成23年3月3日（ポスト・セミナー）の計3回、「伝統様式の崩壊と再宗教化をめぐる現代アフリカの宗教動態」について、「再生としてのアフリカ独立50年」を中心テーマに、セミナーを名古屋大学で開催した。

国内外から全体で、他研究費（科研費Sとの合同セミナーあり）による参加者を含めると、7カ国から120名の研究者が参加し、14もの研究発表がおこなわれた。

8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

なし。

9. 平成22年度研究交流実績人数・人日数

9-1 相手国との交流実績

派遣先		派遣元						合計
		日本 〈人／人日〉	カメルーン 〈人／人日〉	マリ 〈人／人日〉	セネガル 〈人／人日〉	タンザニア 〈人／人日〉	エチオピア 〈人／人日〉	
日本 〈人／人日〉	実施計画		1/20	1/15	0/0	1/15	0/0	3/50
	実績		2/32 (1/14)	1/7 (1/14)	0/0	1/23	0/0 (1/12)	4/62 (3/40)
カメルーン 〈人／人日〉	実施計画	0/0						0/0
	実績	1/13 (1/15)						1/13 (1/15)
マリ 〈人／人日〉	実施計画	0/0						0/0
	実績	2/28 (1/13)						2/28 (1/13)
セネガル 〈人／人日〉	実施計画	1/15						1/15
	実績	0/0						0/0
タンザニア 〈人／人日〉	実施計画	1/15						1/15
	実績	1/4						1/4
合計 〈人／人日〉	実施計画	2/30	1/20	1/15	0/0	1/15	0/0	5/80
	実績	4/45 (2/28)	2/32 (1/14)	1/7 (1/14)	0/0	1/23	0/0 (1/12)	8/107 (5/68)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流した人数・人日数を記載してください。（なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。）

※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。（合計欄は（ ）をのぞいた人・日数としてください。）

9-2 国内での交流実績

実施計画	実績
20/35 〈人／人日〉	11/21 〈人／人日〉

10. 平成22年度研究交流実績状況

10-1 共同研究

—研究課題ごとに作成してください。—

整理番号	R-1	研究開始年度	平成 21 年度	研究終了年度	平成 23 年度			
研究課題名	(和文) 伝統的生活様式の崩壊と再宗教化をめぐる現代アフリカにおける宗教動態 (英文) Religious Dynamics of Contemporary Africa concerning the destruction of Traditional Life Mode and New Religious Movement							
日本側代表者氏名・所属・職	(和文) 名古屋大学大学院文学研究科・教授・嶋田義仁 (英文) Graduate School of letters Nagoya University. Professor. Dr. Shimada Yoshihito							
相手国側代表者氏名・所属・職	Mali : Dr. Samba Djallo, University of Bamako, Flashe ; Professor Cameroun: Dr. Saibou Nassourou, University of Yaoundé I, Associate professor Tanzania : Dr. John G.Kiango, University of Dar es Salaam, Insitute of Swahili, Professor Senegal : Dr. Abdou Salam Fall, University of Cheikh Anta Diop, Fundamental Institute of Black Africa (IFAN)・Professor							
交流人数 (※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入のこと。)	① 相手国との交流							
	派遣先	日本	カメルーン	マリ	セネガル	タンザニア	エチオピア	計
	派遣元	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>
	日本 <人/人日>	実施計画 実績	1/20 2/32 (1/14)	1/15 1/7 (1/14)	0/0 0/0	1/15 1/23	0/0 0/0 (1/12)	3/50 4/62 (3/40)
	カメルーン <人/人日>	実施計画 実績	0/0 1/13 (1/15)					0/0 1/13 (1/15)
	マリ <人/人日>	実施計画 実績	0/0 2/28 (1/13)					0/0 2/28 (1/13)
	セネガル <人/人日>	実施計画 実績	1/15 0/0					1/15 0/0
	タンザニア <人/人日>	実施計画 実績	1/15 1/4					1/15 1/4
	合計 <人/人日>	実施計画 実績	2/30 4/45 (2/28)	1/20 2/32 (1/14)	1/15 1/7 (1/14)	0/0 0/0	1/15 1/23 (1/12)	5/80 8/107 (5/68)
	② 国内での交流					11 人/21 人日		

22年度の 研究交流 活動	3ヶ国（カメルーン、マリ、タンザニア）の4研究者を招いて、3セミナーを含めて、「再生としてのアフリカ50年」をテーマに共同研究をおこない、また日本側4名の研究者が3ヶ国（タンザニア、カメルーン、マリ）で研究交流をおこなった。
研究交 流活動 成果	独立50年を迎えたアフリカが、「アフリカ再生」をテーマに、2015年の「アフリカ合衆国」建国にむけて胎動をはじめ、その第一ステップとしていくつもの地域共同体の強化発展がすすめられていることが明らかになった。本年は特に、高等研究・教育レベルでの地域共同体化にむけての諸側面をあきらかにした。
日本側参加者数	
25名	(13-1 日本側参加者リストを参照)
カメルーン側参加者数	
3名	(13-2 カメルーン側参加研究者リストを参照)
マリ側参加者数	
2名	(13-3 マリ側参加研究者リストを参照)
セネガル側参加者数	
1名	(13-4 セネガル側参加研究者リストを参照)
タンザニア側参加者数	
1名	(13-5 タンザニア側参加研究者リストを参照)

10-2 セミナー

—実施したセミナーごとに作成してください。—

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業 伝統様式の崩壊と再宗教化をめぐる現代アフリカの宗教動態 —再生としてのアフリカ独立 50 年祭-アフリカはどこへ行くか- (英文) JSPS AA Science Platform Program Religious Dynamics of Contemporary Africa concerning the destruction of Traditional Life Mode and New Religious Movement Africa Renaissance at the fiftieth anniversary of Independence: Where Africa goes?
開催時期	平成 22 年 12 月 13 日 ~ 平成 22 年 12 月 15 日 (3 日間)
開催地 (国名、都市名、 会場名)	(和文) 日本、名古屋、名古屋大学大学院文学研究科 (英文) Japan, Nagoya, Graduate School of letters Nagoya University
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 名古屋大学大学院文学研究科・教授・嶋田義仁 (英文) Graduate School of letters Nagoya University. Professor. Dr. Shimada Yoshihito
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (日本)	
	A.	B.
日本 〈人/人日〉	A.	0/0
	B.	2/6
	C.	11/66
カメルーン 〈人/人日〉	A.	0/0
	B.	0/0
	C.	0/0
マリ 〈人/人日〉	A.	0/0
	B.	1/3
	C.	0/0
セネガル 〈人/人日〉	A	0/0
	B	0/0
	C	0/0

タンザニア 〈人／人日〉	A	0/0
	B	1/4
	C	0/0
合計 〈人／人日〉	A.	0/0
	B.	4/13
	C.	11/66

A.セミナー経費から負担

B.共同研究・研究者交流から負担

C.本事業経費から負担しない（参加研究者リストに記載されていない研究者は集計しないでください。）

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>伝統的生活様式の崩壊と再宗教化をめぐる現代アフリカにおける「宗教動態」をテーマに、名古屋大学大学院文学研究科を中心にアフリカ6大学との国際共同研究をすすめ、21世紀にふさわしい新たなアフリカ研究のテーマを共同で発掘する。そのために、日本とアフリカのみならず、アフリカ間の研究者の交流対話の場を提供することによって、新たな研究交流の潮流をつくり、若手研究者を、最先端のアフリカ研究の流れのなかに巻き込む。</p>
<p>セミナーの成果</p>	<p>アフリカの多くの国の独立50年にあたる平成22年、アフリカ諸国はセネガルの独立祭にみられるよう「アフリカ再生」をスローガンに、独立祭を祝った。その背後にはアフリカ連合(AU)が創設され、2015年までには「アフリカ合衆国」を目指そうとする運動がある。地域共同体の強化発展にみられるように、植民地主義体制のなかで形成されたアフリカ国民国家の再考があり、アフリカ内グローバル化がアフリカのイニシアティブで進みつつあることが明らかになった。本年はその現実を特に、アフリカの高等研究・教育のアフリカ内国際化において検討した。</p> <p>ダルエスサラーム大学キアンゴ教授は、東アフリカ諸国の大学がイギリスのロンドン大学支配から独立する運動を経て、今東アフリカ諸国のイニシアティブにおいて大学間協力がすすんでいる状況を論じた。バマコ大学ジャーロ教授(元コナレ大統領官房長官)は、国民国家として独立と言う名の孤立化に向かっていった西アフリカ諸国が、Open Africaの理念のもと隣国間の協力体制を急速に構築しつつあり、なかんずく、大学間協力関係が進んでいる実態を、近年の学生数増大により大学教育が危機状態になっている現実の紹介とともに論じた。</p> <p>実際地域間協力の進展は、大学教育に危機も引き起こす。カメルーンのカウンデレ大学出身の名古屋大学文学研究科留学生ウスマン・アダマは、隣国の大学などでも学ぶことができる状況がカメルーンの学生に新たな活気を生み出していることを紹介しつつも、多国籍出身学生であふれカメルーンの大学の状況とその待遇に政府・大学が苦悩している様子を紹介した。</p> <p>脱国民国家化は、各国の地方分権化とも連動している。カウンデレ大学のアダマ教授は、Africa in miniatureとよばれ、国内に民族的宗教的な多様性をかかえこんだカメルーンにおいて、イスラーム文明が国民国家体制にどのように対応し、現在の脱国民国家運動の中でまたどのような動きを見せているのかを論じた。バマコ大学</p>

	<p>のケイタ准教授も、マリでも地方分権化が著しく進み、首都以外のセグに大学が新設され、トンブクトゥにも大学建設の動きがあることを論じた。</p> <p>アフリカ国民国家が、国民国家の地域共同体への統合と地方分権化の二つの方向において、脱国民国家化しつつある姿が、本年のセミナーから明らかになった。しかも、国民国家政府はむしろその推進役を果たし、セミナー参加者のアフリカ諸大学の教授たちは、そのためのテクノクラートとしてそれぞれ重要な役割を果たしていることが明らかになった。</p>													
セミナーの運営組織	<p>コーディネーター： 嶋田義仁 名古屋大学大学院文学研究科・教授</p> <p>運営委員： 和崎春日 中部国際大学・国際関係学部・教授 佐々木重洋 名古屋大学大学院文学研究科・准教授 山田肖子 名古屋大学大学院文学研究科・准教授</p> <p>事務局 松平勇二 名古屋大学大学院文学研究科博士課程 ウスマーヌ・アダマ名古屋大学大学院文学研究科博士課程</p>													
開催経費 分担内容 と金額	日本側	<table border="1"> <thead> <tr> <th>内容</th> <th>金額</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>国内旅費</td> <td>0 円</td> </tr> <tr> <td>謝金</td> <td>0 円</td> </tr> <tr> <td>備品・消耗品</td> <td>0 円</td> </tr> <tr> <td>その他経費</td> <td>0 円</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>0 円</td> </tr> </tbody> </table>	内容	金額	国内旅費	0 円	謝金	0 円	備品・消耗品	0 円	その他経費	0 円	合計	0 円
	内容	金額												
	国内旅費	0 円												
	謝金	0 円												
備品・消耗品	0 円													
その他経費	0 円													
合計	0 円													
() 国 (地域) 側	<table border="1"> <thead> <tr> <th>内容</th> <th>金額</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	内容	金額											
内容	金額													
() 国 (地域) 側	<table border="1"> <thead> <tr> <th>内容</th> <th>金額</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	内容	金額											
内容	金額													

10-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

計画通り、今年度の研究者交流は実施しなかった。

11. 平成22年度経費使用総額

	経費内訳	金額（円）	備考
研究交流経費	国内旅費	264,470	
	外国旅費	3,281,705	
	謝金	75,000	
	備品・消耗品購入費	661,129	
	その他経費	479,212	
	外国旅費・謝金に係る消費税	130,527	
	計	4,892,043	
委託手数料		489,204	
合 計		5,381,247	

12. 四半期毎の経費使用額及び交流実績

	経費使用額（円）	交流人数<人/人日>
第1四半期	0	0
第2四半期	562,648	3/14
第3四半期	0	4/27
第4四半期	4,329,395	12/87
計	4,892,043	19/128